

# ミャンマーオンライン派遣プレプログラム 第2回目が実施されました

対日理解促進交流プログラム「JENESYS」高校生オンライン派遣プログラムの第2回プレプログラムが、十一月十一日(金)実施されました。

参加生徒による感想(一部抜粋)を紹介します。

今回のプレプログラムでは、JICAのことについてたくさんのことを教わった。まず、JICAのミャンマー支援には大きく分けて三種類あることを知った。一つ目は、「国民の生活向上の支

- 【参加生徒】11名
- 2年生
 

田中さくら	西田千華	小竹黄葉	宮崎遥
-------	------	------	-----
  - 1年生
 

北出敦寛	芝田葵依	寺井巴菜	中村壮太
橋本昊征	早田朱里	本田玄節	

- 【プログラムの主な内容】
- JICA ミャンマー事務所所長 工藤氏による講義
  - 質疑応答

援」、二つ目は、「経済、社会を支える人材の能力向上や制度の整備の支援」、三つ目は、「持続的経済成長のために必要なインフラや制度の整備等の支援」である。これらに基づいて、JICAはODAという「政府開発援助」をしている。ODAにも種類があつて、「多

国間援助」と「二国間援助」の二種類があり、二国間援助にも、お金を提供する「有償資金協力」、物を提供する「無償資金協力」、人を通じて技術を提供する「技術協力」がある。



今回のプレプログラムでは、約十五の支援について詳しい説明をもらった。例えば、「バゴー」という地域では乾燥によって様々な問題が起きているので、「バゴー地域西部灌漑開発事業」の名のもと決壊しかけの堤防や機能しない水門を修理したり、「バゴー地域西部農業収益向上プロジェクト」の名のもと、米の品種改良の指導や、米の管理方法の指導を行っているそうだ。また、私の印象に残った事業は、交通関連の事業で主に二つある。一つ目は、

「新タケタ橋建設計画」である。旧タケタ橋は、新タケタ橋に比べてすぐに渋滞しやすく、そもそも橋全体がボロボロだった。しかし、この橋がなければ交通を使う産業に大きく影響するため、新タケタ橋を建設する計画が立てられたのだ。新タケタ橋は旧タケタ橋に比べて幅が広くなつていて、スムーズに渡れるようになり、何より外見が美しくなっている。二つ目は、「ヤンゴン環状鉄道改修事業」である。この事業では、ヤンゴン環状鉄道の信号や踏切の設備と更新をしている。しかし、この事業には驚くべき支援があつた。それは、日本の中古自動車がミャンマーに輸入されていることだ。つまり、輸入された日本の中古自動車がこのヤンゴン環状鉄道で使われているということになる。私はとても驚いた。なぜなら、もはやこれは鉄道のリサイクルだと思ったからだ。支援の仕方にも色々種類があるのだと、この時気づいた。

本田玄節



第一回プレプログラムを通してミャンマーで今起こっている多くの課題を知り、今回は、それに対してどのような取り組みが行われているのか知ることができました。前回の話を聞いて、対策などがあまり行われていないのかと思っていましたが、日本がたくさん支援していることがわかりました。例えば、教育面での支援ではミャンマーで行われている暗記教育を変えるた

めに教科書を作ったりしていました。ミャンマーではさまざまなか文化が共に暮らしているので、その文化にあった教科書を作らなければなりません。これは多くの知識があるから、ミャンマーの文化を理解しているからこそできたことだと思います。実際の授業の動画で子供たちが楽しそうに授業を受けているのを見て、私もとてもうれしくなりました。

このように実際に課題を解決するための行動を起こして、人々の生活をより快適なものにし、人々を笑顔にする活動を行うことはとても素敵なことだと感じました。また、支援を通してミャンマーと日本の絆がさらに深まればいいなと思いました。

小竹黄葉

今回はミャンマーへの支援を行う日本の機関 JICA の方の話を聞き、主に JICA がどういった支援を行っているのかを知った。JICA が行っている支援は大きく分けて三つで、「技術協力」「無償資金協力」「有償資金協力」で

ある。特に私が気になったのは技術協力である。技術協力では人材派遣を行って日本が保有する技術をミャンマーに伝え、自ら発展できるように支援するのだ。この方法はとてもいいと思った。理由二つある。一つは、人と人が関係するので現在進行しているグローバル化にあっていると思っただからだ。ほかにも人が関係することでお互いの国の利益も生まれる。例えばミャンマーの人々のコミュニケーション力が向上し、JICA を通じて他国との良好な関係を築ききっかけ



にもなるのではないかと思う。日本は、人を通すことでしか知ることができないミャンマーの現状を知ることができない。二つ目は、上下関係が他二つよりも生じにくいということだ。上記の理由からも、お互いが対等な関係でいられるのがこの技術協力であると思う。私は支援をするのに上下関係は必要ないと思う。これらの理由より技術協力は良い方法だと思った。しかし、この技術協力にも問題があると思った。「現在のコロナ禍で実践できているのだろうか」ということだ。JICA の方に質問したが、現状では難しいようだ。コロナ禍が早く収まり、ミャンマーに十分支援できる日が来るよう、願ってやまない。

芝田葵依

